



双梅



とて彼とく相似る師是た
終一集比のひや
く終一没一
今年十七年其れ廣務を
尊くさ近里の御友河
集の中一白案人
とてこの数
連白

一頭と卷ら何
撰比
満
一
まの師
らん
いぬ

月二
くはともとのを時を文化四丁卯
春白曲律此のりうらら

一統庶杖らうらら



四月十三日當菴正式詠諧

綿畑えんぬらんを四月二日かき

白雄居士

脇起

田村さき多下を此陰り一啼
あかき家子通ふはまりの橋かけを
おろは葉をこもやほ手あひりあり
慈の子れ人をさるくさむ願片き

席林
起怪
嘯月
羅文

酒を月影の泉を飲へし
起ふしに飲も有し子秋の風
聖の位をきに木緘はくしりて
なるのきあふ舟の中道うちひらけ
鐘は飛をの志をしあや歌き
尺ぬえをくらししよもまゝを志はそ
汲ふししとあま堀をくたあ
根穀のちりもやさしきあひり
お方の籠りし伊桑は向ハそ

文海
亀谷
双河
紫里
思雲
牛溲
左井
素時雨
一左

月子里うきせをる連りくせ
夕くれ鳥あけをのく鳥
おむき菜を先はるたりと望
何の事粥もくを枯れ宿
昔嵐の存をい秘りふちの道
業をさ進意乃くのたうしき
嘆をの老子入ると尋らうき
弥生は波をさすふ伴勢浦
飛襟のひてはさるるうす送

路弓
既雪
東河
吉東
可中
買山
蕉山
異文
妙衣

ニ

半子因果をいひくめ々系
以の母せんやうき男の勢大連
素良乃風長屋よ志のふ黄昏
合教の茶邊き子もあらぬ以
志片うまやう子孫の具費す
数う連えまや鎌首の名をふら
野うの嵐は聖おりゆふ秋
年のうち子何れ喜めらねの風
雲のふれは豆もやう々り

悠年
百甫
素水
東白
素江
素山
甫龍
似月
汀雨

人の富ふ多子難たうく音阿け
身子引うきて法田の波とあ
白雲をうう子おとてに夕ひとね
さひしきうもやを連たは秋
下冷ハ未枯うりも哀なりま
子枝さす樟の葉のまらるははし
かたうとむと病のむすわれ
舟を雇へとも雪のふは涼音
藍顔の志不子の連くは安儀

一帆
魚白
素流
家連
文素
若風
為人
吐涼
雨紅

三

三

墨の粒とて書をむくのふら
おもふのみ面を念をきときた
綱のけの鳴乃泥よとて
野原のきりえ志のりあるき
人のとをらぬ道をあしゆ家
お色しるき世のちりゆきをたうと
程のけのやぶにんるよみし
菰をの袖よとてを被もも
いさの粒の乃つを算は

一篋
白太
桂墨
呂中
太登
寄桂
柳花
可明
雲地

飯をのこ湧て流る喜乃水
多ちりよとてはなをのり
あり甲斐もあらはに櫃子よりす
もやくとと乃のみか人
銘く子類を志るせし小さつ
西の心とすよりゆか系乃さ
何ぞり成りけしる無を後
須戸の昇ををむるきぬ
仇をよぶ志とすのいれをの波

麥雨
汀鷺
馬登
馬毛
如柳
春巢
文固
荷水

好む粒金をたねしむ旅人
芦花の飛子付けても月と今
大きくする道に散生り魚
かきあつてもふも佳しき秋の暮
枝の糸子ぬきし股川
三ッ 草らさきのあまら何も玉簾
あらしの蟻塚か人をたふして
飛鳥のそよぎえんぬるの朝
おもしろあり雲子寒の山吹

武田
鳳秋
橋葉
其龍
量哉
五柏
芥仙
茶雨
一中

糖糖のき洞縁をた業る和也
あまらえらなる船小のそよの海
一概子沖へとうきしえくころこ
を矢の敷かゝる子所田
毎升乃新をまきし子飯森せん
葉菓のあまみか秋を来子と糸
三日志月志えし一矢か教子似そ
山詠をあひる袖や露けき
高麗人をおもてそむのたるに鞍

百五
尾次
布山
大曉
布川
竹麩
吐丈
方水
東戸

杉子育ちし杉抄——里帰
懺悔しては法乃道をゆく文
鑑を拜む燈又教りしに
聲子にるい礼をふりし新新
内白いふまゆり降かひふとて
芒鞋よ六礼し松を名所あり
いふはくふるもあまのこまき歌
ひとり子子懐きいひつ、泣く多き
舌をさられし能くめりしとき

竹母
雨林
橋左
桑布
倉古
百河
冠里
冠可
林

は國の音響多ありてきのみき不
精おきそめたは依壁の糸橋
入麩子箸をとくすふささの入
舎乃あまよはるささし——片
そのくさる夕ある杉子老をんそ
多をひらけしる葉の穂そらひ
白露の降してはぬれぬるあれ藁
物も命しはれしき、八鬼山
釈とふり藤芝の表をつき阿婆

路一
白嫁
阿太以
明燧
犀字
圃桂
素極
一知
可運

たき火乃うへり飛す嘯
 時さらけと争過と海客の身
 日けり礼くに誠し史料
 世の真ふや如乃疲在中出
 字如種ゆく草葎乃春
 治泉 文馬 文水 地龍 海方

卯の世や折て乃は病くら物と
 反影さふしむはふ志と流
 御鞍車 宿痛かすにうちまわり
 里乃 喜皇の如 磔 あらけ 持し
 心ゆく 草等 まきらる 月の夜
 こやくとのみ 霞しものふは
 柴の戸を 秋ふるまに 味者 赤く
 人目を 志のふから 羽 能ふみ
 孤高 汀雨 一丘 大器 李雲 素時雨 九塚

吾の中此恋より可成法や一續
佛子を連るふゆたうめう魚
寇とりて大根あるひ志巻して
紀勢うら川を流るる椽木
赤雲くし徳を也く毛さめて月細き
一の勢まじくして一戸を海南全
まうらに毛落り武者のうそ言き
清手洗むるふ朝支くくに
花の霞あむは程ふ大障もせむ

五風 蒼翠 陶居 似月 一中 蒼露 文東 既雪 菜二

眼よりよりあるふ海乃士うら魚
大うらなる子を告ぐす事ありき
ふら子なるは子よりくもれを以ふ
悟氣やし若のまゝをうしうり
恥くしとそめ齋隠くし一得
白きしは雲相のまを興はして
かたる子對し説苑をさむ
雨の骨風はあしうら以とら家
祢よまうりし扱後れし

一輕 入左 魚双 指挂 後弓 孤高 似月 蒼露 既雪

行騰をふくふ獵夫ら山を足て
吾れのおもひを志す如く何あり
舞玉まの阿ふて消け三月の月
露るるまきしハ聲ふのまきし
栗稗子庄司ら宿能扱く返し
妹ら海女もさしおそ後し
昔まといせく、意あらハ礼て鳴瓶
降まといせくは乃白ゆき、
才佐むの白ひまうりの人こそ

陶居 五風 蒼翠 文東 海弓 指桂 入左 象双 左井

芥ひと種をりかの阿解をの

葉

乃水子打ましころ勢ら葉
花橙子供咲あし歌を歩川
ふりよ物多葉捕ひとりのあはさま
人よ志らるし里乃弓や里
梅橙の實能む海なる門乃舟
お齡つべきの山志志らる法由

桂墨 葉布 吾風 文素 雄之

有りてはるるの終におしまれて
君をいよに縁管成りたはる
かつらきの神心をもつらえ
道さへ又くぬをのふりつむ
可れ果し木の石の打傾き
薄くれ時を傳ふとふる
月にけ秋のささの頂磨子似
水よとみしそ乃以後く
去りてハ春相のけりぬお能確

雲橋 其風 雨量 着丈 鳥功 素川 白太 桑布 桂墨

あふらとほして澄くつり棚
まのまのさひしきとて又てうり
物をもつる喜よ日和志とふり
ゆるみ入山六流く事とふり
弁はうき世を傳ふひさふり
銭子小指さし是し船くさ
清祓のやとけ星乃てうけき
とさあめこれあそけ礼誓あは
乳房もるして羅あな乃子

文素 昔風 雲橋 雄之 雨量 其風 鳥功 着丈 白太

用之さきき聲もさるものありまき
妻乞坂よりいり安心のかき
誰れも老をぬ門も色あく
あくむえうりの環も寂と
月の秋もも寂たつくやらん
軒のほろきに蓬ましり
聖分を志しはよ寐るの山
心法も結旅のぬれてまより
法佛乃着ふ是るまき逢

桑布 桂墨 文素 昔風 雲梯 素川 雨量 其風 鳥功

幾乃まより物窓下れり
今ふそそむの人教ふ小立
を扇の志あり結のくを扇子

葛丈 旗之 扇

子嵩ま川花あけものありね哉
わの系子扇其の勢乃下蒼
刀うつ縦治ら揃いし水もて
草のく人よりその軽も今り

羅丈 席杖 柴里

燭子又燃きく月の影薄し
かむしろくれきりくた鳴
椎のまはききりく乃面白
迷ひりさし妹のかれ泣
衣を洗ふところ狂ひのまらき
きまらつとも島寺乃あき
引あつめあさるさし子むら子智
疲はゆらり老る妻乃中
あさるもあつり月子をさるなし

百甫
五窓
丈
甫
里
杖
窓
里
甫

きわくくたに唐紙をさる
あつりもあつりやも寒き
柏子まつ子むく朝もつ
ひし押子海苔ひり茶の中
燈のたられに紙をさす也
退屈を余新子まきらす妻の
一あはしせし日枝乃山さ
紫ふゆはあつりく呼ぶあつり
あつりすさるたも森のさる

丈
窓
里
甫
丈
窓
甫
丈
窓
里

まいら戸の涼い入梅もむらさ
車死たさちうらはらまきし
崩た人の喧嘩の中のをまら礼馬
笑怪乃ほかきまのふりせし
は縮たふたんともたれ家持て
隈乃阿はくし六十の秋
楊うけよれや月夜の園両
風よあさるく萩乃むらさ
川流る昔もろくさてま吉
文 里 甫 丈 窓 甫 里 窓 文

柔もみらくく着履乃音
忍履とて堂れうとろの禁紙
ほそき腕結齒うし戻しつ
をいど木ふく梅うを心とれ凡
赤とさあらのむつまの春
文 里 甫 窓 甫 里 窓 文

飯と酒をまはさんお守お懶の月
錯とそとせぬ門のまき木
凡 窓

とそ礼きぬおのれさ志むむ村處に
鐘の音死しと道百をわしき
録実追く船ををせつけさ
志きり子子智智志月里今り
書又つくれとれと戦事の時るを
心さしく里のお心つれもた
標の葉お常おほせし人の恋
情よましくをさるる在乃中
絶はしと子架の汝電おきふり

嘯月
文海
里文
東河
園秋
文竹
文老
一左
左来

遠よえおお金さしをや傷
月の影君乃窓よ家たきて
枕めさるる唐乃も川を
や言し都のくきなる決りこ
硯を多し玉帛紗やふせし
おの藤かきおひさしとくや今り
老ハ彼者よ髪落てし高き
そりきぬの陽炎さるるむ白
心さくさふ又舞やをれし

桂支
文海
嘯月
儿盛
大壺
桂支
左来
文竹
里文

柳の籬にきれて隔乃さらしき
 東河
 兜をくりに篠乃さかほみ
 圃秋
 夢うよと身をたつほよの雪あは
 一左
 教よる子こる鷓鴣のあし那
 文光
 志つうを流るるそよ市のうけ簾
 圃秋
 見るとまた紙作う刀うつりさ
 文草
 貫つれてやるよしなるぬ黒糸礎
 文光
 鉄あはゆーたる杖こーかき
 東河
 出さぬくあえれ紫妻を肩よ峰
 圃月

猶刈りて初開のうら道
 一左
 着の紫花面白子程風さかく
 里文
 買のきつてはハ道深せきり
 桂支
 ゆきしらも又す典薬のせり
 左来
 と事窺ふほくみまゝとて
 几螢
 むつま〜〜書のみ契るむの宿
 文海
 子虫乃流りて是雨のそ歌
 大壘

鐘鼓をうり春より夏は何き秋を
月をよみ冬はねたその秋のうら
さし舟乃舟をさるる給美くさ
秋の朝氣を人たまはらん
何をさるる羽くく春の歌つき
さよもしもに春をあらにたり
ちからとも枝をとたの玉峰の松
雪のめさきを風ふ風くり
牛の子は十子十子歌よ似そ

一雄
東紅
羅来
緩貞
女島路
可鶯
紅
雄

紅きえのこ歌満乃まら
るはくしのはよ深くをあやあ
唐歯をまのふ性よ秋そそ
月報よしあのをさあくは秋をり
市紅飯屋手つれく乃秋
小空きつよわきまの秋の精は智恵
舞は秋乃餅のあさ死二月
ちるもをささらいりさ人比夕
清ききりたる碑の塔

来
路
鶯
紅
貞
来
旗
貞
来
海

碓氷嶺より

鄙曇らるるに山かかるとも
橋はまきこめて物りしは
取あつたを勢ふとすそれ
みやひもちりし裳もけり
木ひやりと蔭月あは難
鳥帽子あつて世をわたり
季はまきの蓮はちりしは

素弓
巫物
仙鳥
柳東
素柳
山丁

何よいふりて華や
雨の日に袖ふる人の阿も
ほい遂よなかりを乃
ひりくせ戸はの枝枯
袴ひとつをやらすも
唐僧のあう音をうしく
片り勢立よ藪をそよく
捨せせは名もなる菌
太夫といふる朝子

一圭
路白
一水
弓
物
鳥
東
柳
丁

いと雛子をやして世の縁より
あやしも燕いちちをやく来は
袋本よりうまくあぬむだ
おとあやとる楊枝をくしをみ
凡くとやをよに聞たりて
救ふさくるるし燕よも何侍も
狗焦片世よむとしさみほる山
園姑嫲をまもらぬの神
生疎をさへまやめく風
圭 白 水 弓 物 東 柳 丁

碁よりうとくも綿乃何某
駒をりて車まのまゝ有れほと
月のあかさにきゆる異ほし
きまゆとたてる柳条は粒をく
葉の急はさるぬを肉れまなり
杉風う時てもるしや高き
鬼をいのれと肩さつきの瘤
一此の白のおろしハ雪の降るに
隣乃馬を何を嘶く
圭 丁 東 柳 物 弓 水 白 圭

笑花に侍照すす妻乃友
水掬ふ手子陽春のこほ

鳥 水

柏山まつのあはしを折えたり

樽もあはれめと写ぬいと空を

馬南

水乞ふ舎人いとくちをつきそ

岱雨

留まるとるり八門あけを返

蓬水

影のほて三々印りの山の月

出河

さしめてはみし鹿さびふもは

云鳥

通近ハ鳥よのあはれ人もあり

仙露

恋まふにこそふし鏡よを影

其尹

あはれもあはれぬ眼を視て

湖語

鏡にふりくく鏡のまはゆき

岱

法師のの席よ火く数おはし

南

門よあはれあはれめくくくとるる

河

さああはれあはれはの月おは

水

嚏よあはれ袖乃志は銀

露

市中にそのれを志すべしとてまふ元
人よ飛空集をこころふさるにたり
御や—ののむいあませ来たは
わをそえくりり妻乃いり阿い
そよとくちりゆくあうも美しき
二鬼島水の河—と勢のるみ
そのれで推子いこる物河に
入橋よ妻不借乃記ふし—
惟子出ちきるしとる懲つそそ

尹 詠 島 雨 南 河 水 病 香

赤とやふき流焚火おそ詠し
あ上の様晴り朝ほりけ
飛空集をそり又動く雙烟
地まつりにとるり村をそりの餅
歌子中よくとやふれにたり
手枕乃志ひこ程よ月待と
とこあくり帰放ちとりり
妻ある—の身をふる田守 畠香
句引され—人と集と

尹 路 雨 南 河 水 病 香 鳥 詠

唱神よ手みかきかきを徳たちて
山見る河と如窓阿希みたり
を法花よ来の代まても経う種
等の命色ありたけ乃春
河 南 雨 尹

焚定してまてまされしついで
白いをこめてひくくまらきく
たれども世せぬをの唱やん
雨 紅
赤 達

一節裁ふくを達者初きくし
庵子来て幸いひふの月か照
置きもまて眉さうきあつゆ
いらまして人初丁きくこま
仇み鏡のくものふりゆく
鉄橋水よ奈所目志のふの物嵐
くさきくく雨乃志き波
覺めらむうしほゆる友の来て
扇をうけぬあまもも友し
鳳 秋
五 拍
席 杖
紅
達
彩 雨
拍
杖
紅

歩ふぬ月子志留りの山ひき
 鹿ふらんきいてしらの留る處
 筑紫を秋野をうけし秋の風
 きしれこらるやさきふおれを
 初むの跡めにとそめ携えられ
 枕よたらぬ暮の暮り人し
 嘗の好音渡り 壺中一に
 日和仕合侍勢のうらな浪
 馬かすよのうそ臥れわかれ時
 拍 雨 秋 遠 紅 拍 蕉 山 秋 達

賊里癖はくまつの源一さ
 柳弓子のつもとまあうちま
 折くあはれあ迎ふふささ
 一夜くる法海り宿の籠し丹
 心平親の目を泣てくさ
 山里のきふる雪吹の音るで
 破きけ身の塙乃くらま戸
 けつつふよひさう阿保帯はかう
 鶴とそつさう帯染本ねえつ
 拍 雨 遠 紅 拍 山 秋 達 紅

坐立をまて一里ならずの赤松
心阿ふ人種て嬉しく
津をとり僧のしあぬるあは
記念やおくる柳折れた錨
姨捨ハ谷の奥迄も志すハ
五人三人うち折れた

山 紅 遠 秋 柏 華

米糞のふりて老るるちいさ
舟乃りゆはあは頼るる
人の心満れよ事を禁め捨て
かきかきと針におもふまの風
三百存よりとらふあつたき
小柴をくちあつたや、寒きちり
まはるるあつたき、境の境
寝るあつたの解、志のあつた
あつたあつたあつたあつた

百河 可遠 文水 遠河 水遠 遠河

於をいへばわん人のおまねの
月八乃そいふ者たましく障子忠
現うらねた引く妙妙なり
その実叶あし文をちうそあて
俵うさねし又る社家の存
むつ備りく終るけうく写能
笑ふも癖にさり安ききけ
此はハ志はうふちりし寺のむ
半ハくし連岐蘇のきさくき

水 河 逕 水 河 逕 水 河 逕

米穂のちうくあはれし春お霜
茶をきく登たさくくとのこ
法眼うむかしをあひ料に庵
とりていふふさく信乃於堂
松のそ物とるりし朝朗
手扇の終りさくく幸達里
世をさそにんるや人のくを
神のちうくを待たぬの夢
 equal equal equal equal equal
 equal equal equal equal equal

水 河 逕 水 河 逕 水 河 逕

水 河 水 河 水 河 水 河 水
舟う勝きいたるりりりりり
墨海ととも希りしかけを舟を
秋の完中其終いつかすも
草船又強く西のははるる
清瀬の老る此岸の 戸
治を社て治るも安き丸本橋
日あよりいふ阿事ゆめを
舟の舟は舟やぬたの舟も
なるたるあしをくも乃事

藻乃志やあうれれとた風さぐ
かりは是さお位たをうしき
きり希丹限の事をくくく
寐よある跡をを返またにたり
切舟をきらすに海を舟の舟
葉は舟ひのふけし海を
誰くも舟力のめおとあひて

十五

十五

序所此龍の傳の筆の糸
思ふ身乃風又ふりも面をさ
情よきしのを結みちり夜
山さハ寝しをも起ても子親
温泉の浦口を堀遂よたり
待内れあたりに蓬栗の種植て
倉さてもいそぬ養れ能ふの
中しくよ老う給のまのぬも
院神けしきハ的よこそ阿利

林々
之祐
阿太以
馬毛
春巢
雨林
滕五
帆
溟

喜ハたむの奥さもきかまは
時と起病を憐れゆはりて
出代のうらぬとてもも乃義
役りまぢちん又睡が所共う良
賊立る加田よ恨を志うそめて
雪のかけい海袂あるしを
蓑さちの煤おきり火籠をく
むせくする程屋の白えん糸
小はかしく人のうしろかといひ

中
水
母
祐
林
毛
以
雨
文岡

鳥代をみまぬは神の座根之
よれくとも家業にきりしわう船樟
ましは幾り解れ飛り帯
そ文の身はさうに寝て起る
甕乃にはお久しし能かし務
鳩吹を放ち鳥さうとむり
真のらさるる浦一乃夕和
むより子をむりよも喉ふさる
妻をもも——とをわよ急休

巢 帆 水 母 花 祓 中 岡 林

たつむの山きさうに記の鳥居
獨居さうにさし朝お捨る
花

五 花

平月も也初まふと厚麻蓬
人きれくよ友乃山末
木蕉亦う米欲落文よき
星のむりりを袖の月し
け能乃おしこふよ家たあれ

一 簀 踏 方 量 裁 大 曉

小菰の蒼のりをめくち
 松風ハ巻を眼のあやうそ
 演比山伏妻のそとらさるふ
 海を来てハ隣よ控引
 美敷をさみくさる暑なるくし
 鳴降のふりぬくよる井降
 百味の供師を包む江の急
 力を能くあ級妹の世経
 芙蓉を袖くもむ物氣の意
 方 箕 蕉 山 志 厚 園 桂

うつろもさるめ義ハ嵐よそ
 謡めさる世をさるりたさ
 妻ハ只けりも度るもむのん
 田中をささくも度るきれ帆
 家燈の映りうつりてねあけ
 あささめ酒よむやもかき解
 空合乃少よるりとも和田嶺
 雲のさるるも指く乃さ
 佛に名をさる種目をけい
 方 箕 方 方 方 方 方 方 方 方

瘦くはるをあらはし傾殊
誰をたしむるに離るるの仇ふくま
きふまを志はるるの久きはるのそ
呼ぶるて旅人を招く不和川
額をくくるとわがふ楽書
端の情く風乃三日有り
木綿の袖を巻るるのふくつら
餅は花いびるるを能を祝ふとて
朽て又もたふ舟の卜繩
方 裁 山 厚 桂 暁 方 箕 山 厚 桂 暁 裁

奥の鳴礮の気色を忘る
弥生をよそふ履は陽の突
陰深き空に雲を巻よ来て
笠をかきぬるさる早蕨
暁 桂 山 厚

麥打の連伽志免まつかれ可
細れくまに風乃笠帯末
名のを志はるるも震や志はるる
可 文 馬 明

苗條を侍船の形を片と家
 を終つらひ手扇よのるを片と
 堤乃阿多く、城ふとせ馬
 葉ハ折よ志をくしてあつた波し
 ぬるあまのいを書写の種と
 鬼よ角に叶いぬ志を世之鬼
 鐘よ休えの着乃うき人
 志を器くあは車をきしらせそ
 舟涼しさを羽うつ白鷺

馬 明 兩 馬 明 兩 馬 明 兩 馬 明 兩

月よつくる火鏡の志を松やし置
 源飲ころ新乃志方とく欠
 行能も紀の語ハ物又打るやと
 連歌よく侍ふ象河乃侍
 心守の孫とお目し死凡鳥帽子
 妻の已れ目をあしたとく起
 志を信よくも柳露玉一志きり
 教もつて鳥森をたると侍し
 松明よよせてハ之を歌乃亭

兩 馬 明 兩 馬 明 兩 馬 明 兩 馬 明 兩

春にふゆをを尾はをみうた
鰯梅子をさか離るん余は統波山
るの子ふくしり着何けと宮
ほりくさちれる牡丹の着りけて
崗士う統のほききおしあ
負はえりてそとあるけい風書
才近系此ゆ佐何りやるし
まの戸北の放りなるまの舟
孤乃志のふ書くみか統
馬 兩 明 馬 兩 明 馬 兩 明 馬 兩 明 馬

編の香も世をよりしき觸れ茶を
梅は着しハ一吐り乃何免
る打の書り眼を此物ゆりき
隠居をうらまをるの曇くし
花咲て探のひりしのさるしき
春久しくも絶ぬこと乃葉
馬 兩 明 馬 兩 明 馬 兩 明 馬

誰かゆ新しくらん梅のち
葛三

才氣乃入目のおしき学此戸
 三 蘭中
 桂子の粒と片はハ水う社て
 三
 むまひちうふを麻の獨帯
 中
 言をれハえや尺く初る社存
 三
 好とるも磁枕拍子ぬけをふ
 中
 物影ハ考せぬ門子暖もせそ
 三
 海に倦たる信樂乃片等
 中
 僧道子所守せられし一巻裁
 三
 鶺鴒の嘴乃十五日多川
 中

きしめをわ社学たハ教まけて
 三
 わさく志免は礼乃帷子
 中
 返屈始あめく尺ゆ聴支所
 三
 大喧多社存をむや此れ
 中
 夕汐めひさつ子るり社乃所
 三
 宗祇をまつる西栗の洗米
 中
 多くや茶志氣をうけあふを
 三
 泥とい龜の持しは陽ノ巻
 中
 然るを志姫山のくらた礼ハ
 三

加の成りさめー屋邊
望志らぬ夫婦中有り歌乞食
毎橋を泣けと云へん家

中 三 中

あふし予繁令社ハ
あつしてとむ

的星やまふか六て能乃空
さして集編處の枝折戸
唇渡り涙ハ顔引 羨しくん

兄次
超悟

相もくく〜とくより志られぬ
志とゆき只蘇中め身有社也
既中ほーいそくハくた〜り
打ち目ハ流形衆の里つ〜き
後め〜こきたに冬月志月
古〜お〜まほ〜秋の来て
うそ言志社多聞の意様
古とせや配所の月を修り合
名もきささるけ浦山形鐘

近嶺
双河
其井
素水
悟
次
阿
頻
水

松葉乃風徐平一吹持く久き
連歌さうえ子粥其くめたり
終所くさき草の長巻をたれは
空を志片りたる事乃曙
金由りし時正其意の打ひき
鐘ま〜翁をも〜とせを強し
阿比子狐乃宮はく〜して
むうし志終ふの里其志〜舟
焚く〜ヤ志社さる事の名に〜

井 次 悟 吹 河 井 水 悟 次

虫月くらみよ轉新思
古瓦渚の寺平一人は清傳
中子あふし〜翼〜舟 細道
去と種毛多に刀き〜其まはし
松風高くは志多はく〜
隣の家子松写の法舎月うけて
生るを〜放つ急極了の君
白松子酒舟き世とる〜よ々り
頁を由りて〜移ふ 古 郷

河 嶺 水 井 吹 悟 岩 河 井

風通て荷垂くふ大佛
京所便をむとめ仰一西京
給ひ子の二十を過し喜乃目
人ハ米搥糸遊乃加如之
翁色乃白ひ簾子捲志南社
膝より吸さる人穉形冬

水 嶺 次 悟 河 嶺

